



Title	XYZ construction 再考：X is the Y of Z とその関連表現のネットワーク化
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84983
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

XYZ construction 再考: X is the Y of Z とその関連表現のネットワーク化

早瀬 尚子

1. はじめに

XYZ 構文とは、Turner (1991)、Fauconnier and Turner (2002)、Sullivan (2009, 2013)などで言及されているもので、X is Y of Z という形式を取り、比喩的な意味を表す表現である。

- (1) a. The Rockies are the Alps of North America.
- b. ...inflation is a remedy for unemployment.

ただし、同じ形式でも常にこの解釈が得られるとは限らない。たとえば(2)はこれとは異なる。その理由は、(2)は(3b)のように書き換えても意味が変わらないが、本稿で扱う XYZ 構文は形式を変えてしまうと同一意味が得られなくなるためである。

- (2) Hillary was Bill Clinton's First Lady. / Paris is the capital of France.

(Turner (1991), Sullivan (2009, 2013))

- (3) a.# The Alps of North America is the Rockies
- b. Bill Clinton's First Lady is Hillary. / The capital of France is Paris.

(2)の文は A is B=B is A と書き換えが可能であり、A という存在と B という存在の同一指示性を述べる指定文 (Specification Sentences) と分類される。一方、本稿が扱う(1)の文では A is B は B is A に書き換えられない。Rockies と Alps とは無関係の別物でありロッキーとの類推で初めて Alps が North America と結びつけられる措定文 (Predicational Copula Construction) だと言える。また、この形式でなければこの意味を得られないという点では、典型的な「構文」としての特徴を備えていると言えるだろう。

本論はこの(1)に挙げた XYZ 構文がどのように認定されるかについて、実例を検討したのち、構文文法的な立場からその特徴について理論的な考察を行う。そしてこれらが様々な下位構文から成り立つと同時に、比較的抽象度の高めの上位構文から動機づけをもらいつつ拡張していると考えられることを見る。

2. 先行研究

まず XYZ 構文の特徴について述べておく。文献におけるプロトタイプ的な事例は以下のように一等親の親族名称、特に mother を使うものである。

- (4) a. Necessity is the mother of invention.
- b. Death is the Mother of Beauty

c. Repression is the mother of stupidity.

この親族語 (kinship terms) である mother の指示対象が決定されるためには「(誰かの) 母親」という他の要素による具体化が必要となる。またここでの mother は字義通りの「母親」ではなく「始まり・源」という比喩的意味で用いられているという特徴をもつ。Sullivan (2009) は、Croft (2003a) の主張に基づき、自律的 (Autonomous) 要素がメタファー表現の目標領域つまりは字句通りに解釈されるべき内容を表し、一方で依存的 (Dependent) 要素が起点領域つまりはメタファー的に解釈されるべき内容を示している傾向が見られることを、コーパスデータの検討を通じて示した。(4)の事例に即して説明すると、mother of beauty の mother はその指示対象特定のために「誰の」mother かという情報が必要な、関係的 (relational) かつ依存的な要素であると考えられる。また通常の X is Y という形式においても、is Y という要素は、それが叙述する対象 X を必要としていることから、依存的であるが、You are my sunshine という表現における依存的要素 be my sunshine が比喩的に用いられているように、依存的要素がメタファー的に解釈される傾向が指摘されている。これら二つが複合的に合わさっているのが、X is Y of Z という形式である。当該形式において、X と Z はそれぞれ自律的な存在であり、かつ目標領域において解釈される字義通りの存在であるのに対し、依存的要素である Y はメタファー的に解釈されるということになる。

ただしこの形式には、親族名称だけでなくそれを超える様々な名詞が用いられて、幅広く使用されるようになっていることも事実である。たとえば次のような例がこれにあたる。

- (5) a. Tuna is the oil of the Western and Central Pacific. (Slate Magazine)
b. They (=Palau) became the Saudi Arabia of sashimi. (Slate Magazine)

パラオ共和国ではマグロ漁が盛んでそれを国の大きな資源としていることから、「マグロは西太平洋・中部太平洋の石油である」と言い、また「パラオはサシミの世界のサウジアラビアになった」と述べている。ここでどのような要素がこの Y の部分に生起できるのか、もう少し詳細にその性質を検討してみたい。

3. 固有名詞が来る場合

Y の要素には kinship relation が用いられると Turner (2002) は述べているが、データをよく検討してみると、Y にはそれだけには限られず、固有名詞が多く用いられている。

- (6) a. Burton played 136 performances of Hamlet over 18 weeks. The production grossed \$1,250,000 and Elizabeth hailed him as **the Frank Sinatra of Shakespeare**.
b. **"Eric Raymond is the Margaret Mead of the Open Source movement"**
c. **Was Margaret Thatcher "the Ronald Reagan of England"?**

いずれの例においても固有名詞が使われている。(6a)では「シェークスピア界のフランク・シナトラ」つまりもっともその世界で成功した人を表している。また、(6b)では「オープンソース運動におけるマーガレット・ミード¹」、つまりオープンソース分野という「未開の地」を切り開いてみんなに広く知らしめた人という意味を表す。(6c)でも「サッチャー元首相はイングランドのレーガン」というのは、アメリカのレーガン元大統領と同じくどちらも新自由主義国家をまい進させる強力な指導者という役割を持っていたことを表している。

ここでもう一つ注意したいのは、固有名詞に定冠詞の *the* が用いられていることである。これは定冠詞が普通名詞化していることを示している。例えば以下を見てみよう。

- (7) a. A: Let us introduce today's staff member. This is Mary Jones. This is Mary Smith, another Mary. B: Oh, two Marys?
b. A: I happened to meet Judy at the station yesterday. B: Do you mean the Judy who is Bill's girlfriend? (早瀬 2002)

Mary という名で呼ばれる人が複数いる場合には、固有名詞も *Marys* と複数になりうる ((7a)) し、(他の人ではなく) Bill のガールフレンドなのかと尋ねる場合((7b))には *the* がつく。この意味操作は、同じ *Mary* という名の人が複数いるという前提に基づき、その人々の共通性 (= *Mary* という名で呼ばれる人) を意味として抽出したものと考えられる。つまり、固有名詞 *Mary* は個別の人物に結びついた具体レベルの意味であったのが、そこから「*Mary* という名で呼ばれる人」という、二人が共有する共通性を表す表現となり、意味の抽象度を上げたタイプ表現、つまり普通名詞と同じ性質を帯びると考えられる。固有名詞が可算名詞に変わるのは、指示対象の概念レベルが上がって、タイプ表現になった結果と考えられる。

ちなみにこの現象は不定冠詞 *a* でも同じくように観察される。例えば *a Shakespeare* で「シェークスピアのような人」を、また *She did an Elizabeth Taylor* で「エリザベス・テラー気取りのふるまいをする」となるように、固有名詞は普通名詞と連続している。

普通名詞の意味として抽出される共通性は必ずしも定まったものではない。*Mary* のような一般的な名前であれば「*Mary* という名の人」という名前形式に依存した意味が抽出されることもあるが、有名人の場合にはその人の世間的な評価や有名なエピソードなどが取り出されることもある。ここにはいわゆるシネクドキ的な操作が行われている。たとえば *Shakespeare* のような人、という共通性を持った人物の最も適切かつ典型的な具体例は *Shakespeare* 本人である。(8a)では *Shakespeare* という具体事例を言語的に示すことにより、その人が典型的に保持していると認められる性質や属性 (をもつ人) というカテゴリー抽象的に指示していることになり、これはつまり「種で類を表す (*Species for Genes*)」タイプの

¹ アメリカの人類学者で、ジェンダーという語を使った人。ニューギニアの3つの種族についての文化人類学的研究で有名。

シネクドキが関わっており、その中でも個体の名前を、その属性をもつカテゴリー全体を指すものとして用いているのである（尼ヶ崎 (1990: 62)、山泉 (2005)）。特にこの種で類を表すタイプの解釈が理解されて成立するには百科事典的な知識がその背景にあって伝達の場合にいる人々に共有されていることが求められるため、解釈の難易度は高くなる。

このように固有名を基にしたタイプの表現は他にも多く認められる。以下はその類例である。（<http://itre.cis.upenn.edu/~myl/language-log/archives/003394.html> も参照のこと）

- (8) a. ...it is probably only Nelson Mandela whose charisma, role, and accomplishments give him some claim to be **the George Washington of his country**.
- b. Geoffrey Moore is both **the Carl Linnaeus² and the Charles Darwin of business and markets**.
- c. One writer referred to Breathnach as **the Isaac Newton of the Simplicity Movement**.
- d. Saddam Hussein is **the Adolf Hitler of the 1990's**.

(8a)は「彼の国のジョージ・ワシントン（アメリカ初代大統領）」、(8b)は「ビジネス界のカール・フォン・リンネであり、マーケット市場でのダーウィン」、(8c)も「シンプリシティ運動の領域におけるニュートン」(8d)「90年代のヒトラー」と、いずれも共通してその固有名で指示される人に対する百科事典的な知識・世間的な評価を定冠詞theによって表している。この意味が対応する形式として、ここではさらに抽象度を上げ(X is) the <Proper Name> of Z というスキーマを取り出すことも可能である。いずれの例でも定冠詞theを伴い、固有名で表される人にまつわる特質を備えた人であることを表していると言えよう。

この固有名は、もちろん人名には限定されない。以下のように特定のグループ名であったり、病気の名前であったりと様々である。

- (9) a. "If allowed to, Hezbollah could easily become **the Taliban of Lebanon**."
- b. The American Civil Liberties Union is now so fanatic and loosed from common sense that it has become the Taliban of liberal secularism.
- c. Don't forget #Gamergate, **the Taliban of social media**.³
- (10) a. Nationalism is an infantile sickness. It is the measles of the human race. " (Einstein's quote)
- b. but I do think that Jennifer Hepler and the likes of her are **the cancer of video gaming industry**.
- c. The newly-gained knowledge could help managers target areas that might fall next to

² Carl von Linnaeus カール・フォン・リンネは、スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者。ラテン語名のカロルス・リンナエウスでも知られる。「分類学の父」と称される。

³ (<http://itre.cis.upenn.edu/~myl/language-log/archives/003394.html>)

sudden oak death, dubbed “**the Ebola of the plant world**” by one study author in a press release.

- d. In some ways, **mobile malware is the Ebola of security**. Once infected, the danger is real. But the actual risk of infection is low.

ただし病気の名前なら何でもこの Y のスロットに入るわけではない。bird flu や swine flu、また 2021 年現在まだ脅威の真ただ中にある COVID-19 は、字義通りに解釈される例はあっても、比喩的に使われている実例が現時点ではあまり見つからない。まだシネクドキ的に上位カテゴリー解釈ができるほどの特徴的な評価が定まっていなかったためかもしれない。

また、形式的に大文字で表されるとは限らない **dark matter** のような「固有名詞」が用いられた事例も見つかる。こうなると、もはや固有名と普通名詞との境界は曖昧になってくる。

- (11) a. Non-coding RNA is the “dark matter” of the genomic world.
b. Why **ambivalence is the dark matter of political debate**
c. untested code is the dark matter of software
d. “Apple’s iMessage is the dark matter of social messaging apps,”

これらは一般名詞であっても実は固有名詞に定冠詞がついた時と同じく「～のようなもの」という解釈が成されていると考えられる。

これまでをまとめると、一般名詞であっても **X is the Y of Z** という言語形式をとった場合には、Y の部分をその対象にまつわる百科事典的知識を呼び起こさせて「～のようなもの」という解釈を生み出す、いわば全体として（旧来の意味での）構文形式だと解釈できる。

4. X is the new Y

近年 Snowclone という名で知られるようになった **X is the new Y** というスキーマ形式も、この構文のバリエーションの一つとみなせる。厳密にはこれまで見てきた構文のうち **of Z** の部分が存在しないが、意味的には酷似しており、部分全体リンクで結びつけることが可能である。同時に Y の部分が具体的語彙項目である **new** によって特定化されているため、具体事例リンクでも同時に関連付けられる。この二つの関連付けによって認定される別の形式をもつ構文形式とみなすことができる。以下ではその特徴を考察していく。

まずこの構文形式は色を表す語彙項目周辺で顕著に用いられている。

- (12) a. Green is the new black.
b. Comedy is the new Rock’n Roll
c. Programming is the new literacy
d. Why Kindergarten Is The New First Grade

もともとは green が (black のように) 次に流行る色だ、という意味で用いられていた。「黒のように」という解釈からわかるように、the new black の black は黒そのものを意味するのではない。ファッション業界における (その時の) 黒という具体的な色彩から、それが具体例を成す上位のカテゴリー、ここでは「流行色」というカテゴリーを表すようになっている。このメカニズムは先に見た the+固有名詞の時と同じである。

類例は他にもあり、X is the new Y 構文スキーマの生産性の高さを物語る。X や Y は変数として様々なものをとる。

(13) X is the new smoking

- a. Have a seat. No, wait! Stand. With researchers suggesting that “**sitting is the new smoking,**” sit-stand desks (SSD) have become a common tool to quell sedentary behavior in an office environment.
- b. Their extensive research was summarized in one provocative statement: **Driving is the new smoking.**

(14) X is the new gold

- a. Silver is the new Gold.
- b. **Wheat**, according to the commodity dealers, **is the new gold.**

(15) X is the new oil

- a. people have abandoned petrochemicals at an ever-increasing rate. **Renewable energy is the new oil** and companies leading the field are booming.
- b. “**Water is the new oil,**” he says. “Water is going to be a very valuable commodity and we need to value it and put effort into making sure it's safe.”
- c. “**Education is the new oil**”

Oil のように、シネクドキ的なカテゴリー解釈が「重要資源」「お題目として唱えられるもの」として固定化されているものもあるが、以下の drug のように複数の解釈が導かれる場合もある。Drug は、「常習性がありかつ体に害のあるもの」という解釈もあるが、製薬業界という限定的な文脈では「売るべき商品」という解釈も出てくる。

(16) a. **DIET IS THE NEW DRUG, AS SCIENTISTS DISCOVER THAT THE BENEFITS OF FOODS GO WAY BEYOND BASIC NUTRITION.**

- b. He says that **pornography is the new drug** and his mission is to raise awareness about its destructive nature.

(17) Data is the New Drug⁴ (Title of the Book)

⁴ 製薬会社が薬にかかるデータ分析に力を入れるようになったことを受けている。Drug の意味が一様に解釈されるわけではないことを示唆している。

上記のように the new Y の Y 要素が固定化し X を自由に入れ替えるパターンもある一方で、Y も特に固定化せず X と共に様々な変数を許す表現も見らる。

- (18) a. Obnoxiousness Is the New Charisma (嫌われることがこれからのカリスマ性)⁵
b. antiracism is the new racism.

ここで X や Y に生起できる要素は名詞には限られない。COCA で[is the new ADJ_ALL .] と検索式をかけると、33 タイプの形容詞が X および・あるいは Y の要素に来ている。⁶ (19) はその例である。また(20)のように副詞とも目される要素もこの仲間入りを始めている。⁷

- (19) a. I'm about to start the promotion for **Risky Is the New Safe**. (Title of the Book)
b. HEALTHY IS THE NEW SKINNY (Title of a Blog)
c. May we never get to the place where **hate is the new normal**.
d. maybe **mature is the new hot**.
e. Good Enough Is the New Perfect (Title of a book)
f. she's got a new book out called **Strong Is The New Beautiful**.
g. Intellect. **Smart is the new sexy**.
h. According to Gourmet magazine editor, **disgusting food is the new cool**.
i. Did I tell you I've taken up knitting? It calms my nerves. Practical and stimulating. What will they think of next? **Knitting is the new yoga**, according to " New York Magazine"
j. Many obesity activists openly emulate the tobacco control lobby, even going so far as to claim that "**sugar is the new tobacco**,"
- (20) a. When it comes to weddings, **less is the new more**.
b. The average American will not be better off in five years — unemployment will remain high and wage growth will continue to be flat," says George Soros, who forecast an "age of wealth destruction" four months before the crisis hit. But in this recovery, **flat is the new up**. Any near-term uptick in jobs will probably be small, because there's still plenty to be milked from existing workers.
c. "**What we keep talking about is the new tomorrow**. There's no going back. Tomorrow will be different. "

⁵ http://www.nytimes.com/2016/01/10/opinion/sunday/obnoxiousness-is-the-new-charisma.html?_r=0: トランプ元大統領を揶揄した記事。

⁶ 2021 年 3 月 15 日最終確認

⁷ ただしいずれの例でも X および new Y の位置に生じることで名詞として「強制 (coerce)」されていると考えることは可能である。

- d. " Because of Covid-19 the outside is the new inside.

さらに、X の要素には名詞のみならず句や文も可能なようである。

- (21) a. **'Too Big to Fail' Is the New Mantra** for Bulls in Stock Market
b. **"All means all" is the new mantra** handed down from education gurus.
c. Beer costs cheaper! **Don't drive, only drink is the new mantra.**

このように、X is the new Y 構文にはさまざまな拡張事例が見られることがわかる。

5. 考察

XYZ 構文は様々なパターンをもつ多様性を持つことがわかった。これを構文文法の枠組みで母語話者の知識としてネットワークの形で定式化すると、どのような表示で説明していくことになるのだろうか。

近年の語彙構文文法 (Croft (2003b)、Iwata (2008) など) の主張によれば、抽象度の高いスキーマは過剰な生産性という問題をはらむ、つまり認可されるはずなのに実際には生じない gap を生んでしまうとされる。使用基盤の考え方からも、上位構文の存在は理論的には否定されないが、母語話者にとって心理的にも有効なのは、実例から抽出される下位構文スキーマであるとして、こちらを重視することを主張している。

この考え方に基づけば、まず確実に、X is the new Y という下位スキーマを別途立てる必要がある。X is the Y of Z という上位のスキーマだけではとらえきれない具体的な語彙項目 new が構文要素として固定化されているという形式的特徴を持っているからだ。使用基盤の考え方に従うと、構文スキーマはあくまでも実例に基づいてボトムアップに形成されていくことになる。それだと最初の例は **Green is the new black** といった色彩語によるものであり、そこから取り出されるのは X is the new Y よりもまず N is the new N というものになる。

また部分的なところで事例のクラスタ化が起こっているのも事実である。N is the new N のもとには N is the new {drug/green/Mantra} などの下位構文があり、その周辺に新しい事例が固まって生じている。このように、そのスキーマの範囲内で新しい事例が生まれることを扱うには下位構文スキーマを立てるのは有効である。さらにこのスキーマが 4 節で見たように様々な関連表現を生んでいることから、スキーマが定着し新しい表現を生む鋳型として参照されていると想定できる。

ただし、疑問もある。それは拡張事例がネットワーク上どのように組み込まれていくかである。具体事例からは上述のように N is the new N スキーマが抽出・仮定できるが、一方で (20) のように N ではなく A (形容詞) カテゴリーを用いた拡張例がある。そもそも N is the new N からなぜ A is the new A という異なるカテゴリーでの表現が最初に可能になるのだろうか。元のスキーマを満たす事例からの類推だとしても、そもそもなぜその類推が可能にな

るのか。さらに副詞や句・文を用いた事例が4節(20)(21)で見られたが、下位スキーマそのものからはこのような新事例が生じることを必ずしもうまく説明できない。

下位スキーマは反例がないことをうまく説明はする。N is the new N の変数を埋めるタイプの事例であれば、この下位スキーマで問題なく現象をカバーし捉えることができる。しかしそれを超える新たな創造的事例が生まれてくる際にそれを司ることはできない。新規事例は下位スキーマの範囲内に収まるものばかりではなく、拡張するところには必ず下位スキーマの守備範囲を超えた事例が出てくる。その時には下位スキーマだけではなくそれを超える上位のスキーマを考えなければならないことになる。ここではむしろ、X is Y of Z というような、カテゴリーを必ずしも特化しない抽象的な形式を鋳型として用いることで、新しい表現が生み出されているのではと考えられる。

同じことが3節で観察した XYZ 構文にも当てはまる。3節の事例からは[NP is the Proper Noun of NP]というスキーマが取り出せる。最初は Y が固有名詞に限定されるかとも思われたが、the Proper Noun という形式で性質属性を抽出して比喩的に解釈する事例だと判定されれば、固有名詞以外でも多様なカテゴリーのものが Y 要素に利用可能である。その拡張を許す時の動機づけとなるのは、実は「下位構文スキーマよりも抽象度の高い上位レベルの構文スキーマ」なのではないか。つまり、X is the new Y という、必ずしも X や Y のカテゴリーを指定しない形式に着目したスキーマが同時に取り出されるからこそ、新しい表現への拡張が可能になってくるのではないだろうか。

一方で、3節で見た事例からは、[NP is the Proper Noun of NP]という構造が取り出せる。X is the new Y 構文は、これとも関連づけが可能である。確認した通り、Y 要素は比喩的・メタファー的に解釈される性質を持っていることが共通しているし、構造も部分全体リンクという形で結び付けられそうである。

また、そもそもなぜ[NP is the Proper Noun of NP]という構造において、Proper Noun が「～のようなもの」という比喩的解釈をもつようになるのだろうか。実はそもそも、Y 要素をカテゴリー名詞として解釈するという特徴は、X is Y という通常の（比喩的ではない）一般的な措定文構造とも連続性がある。たとえば He is a student や John is a grandfather という属性を表すタイプの一般的な措定文（Predicational Copula Construction）は、Y 要素にカテゴリーを表すものを要求する。同じように、XYZ 構文、たとえば[NP is the Proper Noun of NP]構文も、YZ に相当する the Proper Noun of NP の部分をカテゴリー解釈することで同じように措定文解釈を引き継ぐことになる。そもそもこのタイプの表現が最初に出現するときの動機づけになったのは、上位スキーマである措定文スキーマ（X is Y）であり、その意味に基づき、またその形式を引き継ぐ形で、固有名詞を用いた XYZ 構文が出現し認可されたのではないか。3節や4節で見てきた「一見特殊な」比喩解釈は、より一般的な措定文から受け継がれたものであり、固有名詞に the がつくのもその構造と並行的な意味を表すためとも考えられる。

6. まとめ

近年の構文文法理論においては下位構文が重要視される傾向にある。たしかに下位レベルの構文スキーマを設定することで、反例のない構文ネットワークの設定をすることができる。しかし、そもそも構文スキーマは、具体例に基づいて抽出されるものであり、少なくとも構文使用が拡張しつつある初期の段階では「その構文スキーマから予測するならば可能になるはずなのに、現実には実例がない」という Gap からは免れ得ない性質を本来的に持つものである。また、下位レベルの構文スキーマが定着していると、そのスキーマがカバーする範囲の例だけが生産的に新しく生み出されることを予測するが、しかし現実にはその範囲を超えた表現が（類推によって）生み出されることもある。この類推を許すのは、実はもっと上位に位置する、単純な形式に依存した構文スキーマであろう。下位スキーマとは異なる役割が上位スキーマにもあることを、もっと積極的にとらえていけるだろう。

参考文献

尼ヶ崎彬 (1990) 『ことばと身体』 勁草書房

Croft, William (2003a) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. In René Dirven and Ralf Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 161-206.

Croft, William (2003b) Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy, *Motivation in Language: Studies in honor of Günter Radden*, In Hubert Cuyckens, Thomas Berg, Rene Dirven and Klaus-Uwe Panther (eds.), 49-63, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.

Fauconnier, Gilles and Mark Turner (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*, Basic Books.

早瀬尚子(2002) 『英語構文とカテゴリー形成』 勁草書房.

Hayase, Naoko (2018) Issues regarding the status of constructional schema, 『認知言語学研究』 3 号, pp. 71-88.

Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, John Benjamins, Amsterdam.

Sullivan, Karen (2009) Grammatical constructions in metaphoric language. In B. Lewandowska-Tomaszczyk and K. Dziwirek (eds.) *Cognitive Corpus Linguistics*, Frankfurt/Main: Peter Lang. 57-80.

Sullivan, Karen (2013) *Frames and Constructions in Metaphoric Language*, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.

Turner, Mark (1991) *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*. Princeton, NJ, Princeton University Press.

山泉実 (2006) 「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」『日本認知言語学会論文集』 6: 288-298